

藤井 徹著

菓木栽培法

四圖

福岡第一師範學校
(學校圖書)

分類	第	號
		門
		部
果樹栽培		類
目		次
全	1	冊ノ内第 1 冊
分類	第	號
	624	

師範學校

書 門 物 博 園
部 物 植

番 33

號 4

8 冊ノ内

T1A1

61

F57

菓木栽培法卷之四

東京 藤井徹 著

田中芳男 閱

坂本徳之校

加藤竹齋 画

第四編 糞培論

第五十五章 糞培の總論

凡そ糞養の植物は於るに猶飲食の動物に於るが如し、動物飲食せざれば死す。植物糞養をせざれば枯る。故に動物の生に原同一轍なると知る。然とも人畜の食へ皆欲ふ任せて需得べしと雖も、

草木へ飛走きて食と求ると能へば唯其植地は
於て含有の土質と喩收するのみ故ふ土質其性
は適ふれば繁榮暢茂一之ふ反もば衰頹枯槁
も故ふ草木ハ土質は適する次第一と其次ハ
糞培ハ頼らざるをし假令ハ土質其宜を得ずと
雖も糞養して以て助長をべし蓋し遍地無數の
草木區別して別る者ハ殊ふ其成分の各異る由
る成分ハ水素炭素酸素の外ハ尚銻錒亞斯曹達
磷硫黃硅土石灰及塩類の無機體あり是と以て
註凡そ植物百斤の内ハ無機體ハ僅ハ三四斤

ふて其餘ハ悉く水炭酸の三素及少量の窒
素を成る其花實枝葉及澱粉糖油澱謨華爾斯
の各物一々其性質の異なるハ唯配合の分量其
比例と同くせざる由る而して植物と動物
とと總稱して有機體と云ハ纖維組織ハ脈絡
貫通して消化生殖の諸機と具ハ氣水と呼吸
ハ滋養と異類ハ資て内より化生せられあり
金石土塩の山物の如きハ然らば此類ハ同種
の分子外より凝聚して其形と成る者あるハ
之と無機體と名く覆載の間品物衆庶と雖も

總て此二類は出る者莫し、剝薦亞斯又加里と
名く曹達石灰等の如く、草木を焼けば其灰中
に存も其水は溶くる者と灰汁と云、視て辨別
し難けれども、其稟性の各異ると確乎の微證
あり、今淺近の比喻を以て其概略を示さん、以
上の三物と各器に容れ、硫酸を注て親和せし
め、得る所の塩類、互に性質、形状と異ふもの
と一目瞭然たるべし、即ち硫酸の剝薦亞斯は
和せしハ霸王塩（硫酸剝薦亞斯）曹達と和せしハ芒硝
硫酸石灰と和せしハ義布斯（硫酸加爾基）あり、又

剝薦亞斯の硝酸と和せしハ消石（硝酸剝薦亞斯）と
て、之は木炭末を加へ焼けば白塩遺る、坊間小
鬻ぐ剝薦亞斯（炭酸剝薦亞斯）是あり、曹達の炭酸と和
せしハ炭酸曹達あり、之は酒石酸溶液と注げ
ハ曹達之は親和して炭酸遊離し、之が為水
中に泡沫を發せ、即ち沸騰散あり、生石灰ハ炭
酸を脱し、る加爾基かれども久く外氣に曝
せば、漸々之を引て風化し、炭酸加爾基とある、
其時に復水は溶るの性と失ふ、之を灰汁の脱
ちると云ハ非あり、以上酸類と剝薦亞斯曹達

の類と和して成立する。芒硝、消石等ハ化學の
通稱として塩類と稱す。故に常用の塩ハ之と區
別せんが爲に別に食塩（俗名）の名稱を命ず。今
一草木不就て無機體分を含む多少を知らん
と欲せば、先其木を燒て有機體分（水と分氣）の
殘りを飛散しめ、遺る灰を集めて法を以て
分析せば、塩類の分量を知得べし。是等の諸説
ハ固化學の主たる處にして、此編の本旨不
非也。但文詞拙劣にして、前後の意味通暢せざ
るを恐れ、西說中の一端を抽出して、聊に初學

の爲に解釋を下すあり。
之を養ふ者亦是等の滋料を用ゐざる可からず。
之を用ゆるにハ、必も一定の法則あり。其法ハ專
ら樹の需る者と以て、能く其根の吸收に適合せし
むるふ所なり。之と適せしむるは、必も多少の化
熟を要す。草木の滋料ハ人畜の食の如く、其口ふ
入りて後、齒牙をりて噛み胃ありて化せる者ふ
あらざり。多くハ蒸熱腐化及び人畜の體內に在り
て、一回發酵泡濺し、之を因て成形する氣狀水質
の物と以て、人若し堅硬の糞料を培て彼の養分

とある所以、單に蒸熟腐化の功効ありて蓋し
大慈化工の妙機に賴る。夫を糞料に硬ありと雖
も、之を土中へ混合せれば、先づ水分ありて之を
軟膨し、溫氣日光ありて之を融化し、大氣の酸素
ありて之を解渙し、尚且石灰食塩等の者へ分拆
の機を贊け、新に滋料第一の炭酸又ハ安模尼等
を産出し、之を水中へ溶解含畜して始めて彼の喻
收に適合せしむ。故に此石灰食塩等ハ直に養分
と成るの外、他物を腐化解渙するの媒介と爲
ま者あり、又泥炭ハ素と前世界の遺物あり、木葉

樹根の堆積りて炭質と成る者ありて、其水は
溶るの性あり、其地表に在る者へ、大氣日光に觸
て、近傍の水分氣狀の物を吸收し、又容易に之を
他物に分與るの奇性あり、故に之を以て糞料と
調理るの用具と稱するも可あり、但し深く地底
に在る物ハ絶て其用あり、故に植土に混交て屢
耕耙せし緊要とす。西洋の人ハ多く之を掘採て
薪に代へ、又ハ田圃に撒布し、或ハ肥糞に混じて、
土性を肥豊せしと云ふ。又灰ハ炭の再び焼化したる
者あり、其中に所謂剝萬亞斯曹達等の如き從來

草木の質と成立する要分と含む是ハ之を得るの素質不図て異同あれども半ハ水不溶て直ニ樹根の吸収と得る者あり又植物の枝葉種實及緑肥と相する生草類の大ニ肥養の効効有るとハ人々の能く知る処ありて糞弱は乏しき深山僻地ハ僅ニ之と以て禾穀と養ふあり總て此種類ハ發酵し易きものとあり其草木と養ふとは猶肉食の人體と養ふ事草食は勝るが如く元是同體の質かれバ調和と得ると殊ニ速あり而して居用草類の各異る由て功能の優劣有ると

ハ其含蓄物の不同不係る蓋し其内ニ窒素不富める物ハ發育の功急速りて無機體分多き者ハ持久の能多大あり又動物體の草木成生ハ大効有る所以ハ鳥獸魚貝の骨肉皮毛ハ磷酸、加爾基、苦土、曹達、食塩等の合成物なりて共ニ多分の窒素と含蓄む窒素ハ安模尼の本成分なりて悉く植物必需の最大ある者なれば之と以て糞料中の最上品と稱するも可あり然ども是等も亦腐熟分拆の時と得るは非れば彼の喻收不適せむ滋養の効を奏せざることを知るべし是ハ因て之

と觀をば、動物、植物、山物、共に、小分片碎して樹根
に培へば、陽光の化雨露の澤有りて、之と融解し、
且媒介、用具の補助を得て漸く化熟し、之と氣中
に傳へ或ハ水中に溶いて、之と葉、根兩道の喩收
孔より恣に喩收り、遂に繁榮、生殖の基と爲す、是
れ糞培の大綱あり、然ども若し乾固粗大の者と
以し、或ハ之と特別に培用する時ハ、腐化の難易、
撒布の不同、由て、養分と耗失するの弊多し、是
と以て宜く粉碎調和して蒸熟の度と誤らぬ、灌
用の時期と失はざると用要とも、故に各國普通

の法、小積肥、混和糞等の製法あるハ、蓋此蒸熟腐
化の理、外ならず、而して之を用ゐるの要訣ハ、
先づ植物の如何なる成分と固有するハ、因て、其
需る處の者果して如何と知り、又肥糞中の物質
と知て後、其欲する處の肥糞と澆ぎ、以て土中
に含蓄の養分、其成長に不足ある者と補ひ、且年々
の收穫毎に、其消耗したる減量と償ふと主意と
するあり、加之、其各部に於て大に需用と異ふを
る者ハ、甲種の肥糞、特に其枝葉に益有りて、種實
に寸効あり、而して乙種ハ、全く之に反するの類、

都て其需不應ざるふ非き、假令無上の沃土ふ植へ、大有力の肥糞と澆ぐとも、俱う其生殖と資の道ふ非き、灌養の者宜く此理と體して用法と斟酌もべし。故に此術ふ精き者、能く鬚蓋と花辦ふ變じ、又能く橘、葡萄類の核子と去り、更ふ其香味と美するの技倆あるは、是其一證あり。又小麥と種るは、其地珪酸塩ふ富て、燐酸塩ふ乏ければ、莖葉大ふ繁茂せし、雖も實を得ると十分ならん。之は反すれば、莖葉微弱ありても、種實大ふ美あり。如し、是を莖葉と種實とよ於て、互は需

用と異ざるふ由る。故に其全熟と欲せば、以上の二品と兼含する肥糞と澆ぐべし。又馬鈴薯ふ石灰と培用すれば、莖葉と繁くし、剝薦亞斯と施せば、球根肥大あるの類、百般の草木皆然らざる。かゝる豈之と以て偶然に附まづんや。雖然も大凡人畜の食ひ、其臭味は因て能く其好惡の情を知ると雖も、其能毒と辨識するふ到て、實は一大難事とも、況や頑固無情の草木は就て、其好惡と判決するふ於てとや。後世機巧の術漸く盛ふて、頗る其理と詮定せし雖も、其源は蓋し各種の

肥糞と澆用し、其成長の状と觀察して、其當否と知るは外なり。是故に觀察の窮理の門牆より、て、進歩の階梯あり。人門牆に入るは非れ。堂奥と窺ふと能はば、之に入る者、必ず試験と以て本とを、故に老圃は其地の剛柔、燥濕及其形勢、成就、灌用の變化と知り、又四時互變の氣候に依りて、腐熟の乗除と曉り、屢其可否と試み得失と驗して、以て各其家法と、又其品位と區分し其主能と辨別して、或は糞と肥養し或は花葉を走り、或は菓味と美しむる等の殊効と説く、今之と實

業に驗して、頗る微證を得る者多し。然ども余菲才薄聞、て試験の日淺く未だ諸菓樹に就て、一々其當否と知る能はば、故に今僅に一二習熟の法と左に擧て、以て初學の責と塞ぐ而已。畢竟栽培の農家の眼目あれば、其細目も在て、古今諸家の説互に異同あり。余亦別な所見がき、非ざるも小冊子の範圍を脱すの恐れをば、姑く之と他日小譲るあり。然ども各菓樹は殊効の品物に、間其餘下を登載せし。

第五十六章

混合糞 附り 臭氣止の事

此肥糞ハ人家ニ於テ最得易ク、故ニ却テ輕忽シ
易キ品物ニテ、先哲ノ戒ムル處アリ、即
チ日々家室庖厨ヲ掃除シテ、魚肉蔬菜ノ殘屑
味噌糟、酒糟、小糠等ノ棄物及塵芥、煤灰或ハ庭前
ノ枯草落葉ノ類ヨリ些少ノ結髪ノ膩垢等モ
盡ク一所ニ集メ、豫メ瓦石ヲ拾去リ、成丈ケ間
近く諸事ニ障アリ、軒下又ハ糞小屋ノ便宜ナ
場所ニ適宜ノ穴ヲ穿テ、周圍小垣ヲ遠ラシ、其内
一切右ノ雜物ヲ積ム、時々浴湯厨下水又ハ白
泔水ヲ稍濕フ位ニ澆ギ、屢上下ニ切返シテ、不同

ア、腐熟セシ者アリ、之ヲ其儘培物トシ、或ハ他
ノ肥糞ニ混和シテ用ル、時ハ、何ノ植物ニモ意
外ノ功驗アリ、蓋シ一種ノ肥糞ニテ、多數ノ實質
ヲ含ムル者鮮シ、故ニ諸種ノ物ヲ集メ、製スル
ハ、各樹ノ需用ニ任セテ、吸收スルハ便利ナ
リ、而シテ肥糞中ノ臭氣ハ所謂貴重ナル安模尼
ル、其質主テ揮發アレバ速ニ飛散シテ、其功
能ヲ消亡シ易シ、故ニ之ヲ止置法ハ、硫酸鐵
百匁ト水二升ニ溶シ、或ハ強硫酸一匁、水二百
匁ト和シ、之ヲ積肥、混合糞、人畜ノ尿尿其他何品

青島國藥房
第五十四
りても、肥糞と為すべき者の上面と平均して注
置けば、臭氣自ら其内へ潜て、飛散するところあり、其
分量は、臭氣の強弱に由て加減し、大抵其氣の絶
るを以て度とす。蓋し次第は糞料の腐熟するに
隨て漸々遊離する安模尼は、此硫酸鐵水を加ふる
に由て、其成分中の硫酸と親和し、化して硫酸安
模尼と成り、水中へ溶解して復揮發の性なきに
到る。然るに此硫酸に經て安模尼は飽充せば、
復親和すべき者なきが故に、再び臭氣を催すべし。
因て此時を候ひ、更へ同量の藥汁を注ぐべし。其

時間は大抵一週の前後も斯の如く貯置する
者へ、放置の肥糞に比ぶれば、殆ど二倍以上の効
驗あり。故に何品にても腐敗して臭氣と發する
に到らば、必も此藥汁を注ぐべし。當り前件の奇
性なるのとあつて、能く堪難き惡臭と制伏する
が故に、人畜に害ある穢氣と防止するの功殊に
莫大あり。其他義布希、石灰、泥炭又ハ動植物の腐
敗する土と以て、肥糞上と覆ふも頗る同効な
りと云ふ。

第五十七章 生石灰と用て生草と焦く
第十一 青島國藥房

事 附 食塩の功能

生草と刈集て、生石灰と撒布し、之と堆積して上面と踏均し、稍水湿と與ふれば、忽ち熾熱して黒色の焦土と成る。之と直に培物と一、或は他糞は調合して用ゐべし。之と尋常の腐草は比べれば其有力あると殆ど三四倍あるべし。而して秋草の種子と帶たる者、たとひ積肥、厩糞と為して蒸熟せしめ、其種子來春に到て、必ず萌生する者なり。今其法を用ゐるときは、悉く壊敗するを極めて妙あり。其他此石灰は、素より草木中の一成分

あれば、之と養分の要品とするに勿論安模尼の飛散と止め、小蟲と殺し土質と溶解し酸素と吸取り、或は土中へ埋れし落葉、草根及び礦属成分を分解、溶解するの類、其主能甚多し。今茲は又因小食塩の功用と畧説せん。是亦石灰の如く土中へ埋れし諸物を解換して、樹根の吸収に適合せしむるの媒介と為し、殊に動物の爲に能く飲食の消化と賛け、穀肉と腐爛するの功莫大あれば、之と食する人類の排泄物、大に他物の糞溺に勝る。是故に家畜としても、常小之と牧草を加與ふ者

ハ其體と健康肥大ノ一ツテ其尿尿も亦草木の爲
不格別の功能有り又此塩の基礎たる曹達ハ大
抵諸植物中ニ蓄ヘ殊ニ海邊の草ニ多シ是れ培
用ニ於テ欠クベクザラの一證あり但し其純
精の者（曹魯兒）より下等の雜物多キと良トモ其
故ハ舍利塩（硫酸芒硝）曹達（硫酸）等の諸塩と混ルテ草
木需用の爲ニ大ニ便利ナレバあり是を以テ肥
糞の中現ル少々の塵塩と加ル又ハ醬油糟の
類ニても適宜ニ調和セバ必ズ較著キ功驗あり
然ども海邊の地ニテハ害アリテ益ナキと推テ

知るべし。

第五十八章 獸骨と肥糞ノ用ニ關スル事

動物の骨肉皮毛ハ總テ肥糞中の最貴重ナル者
ナレども西洋人の糞溺と蔑視棄捐スルガ如ク
地方ニ依リテハ之と穢物トシテ使用スル者
アリ然ども從來習熟セザル者ハ實ニ其効力の雄偉
ナリと知らザル莫シ獸骨と製シ用ユルニ數法
アリ或ハ之と鐵杵ミテ搗碎キ又ハ一種の器械
ヲ用ヒテ粉末トナシ直ニ田圃ニ培用スルモアリ
或ハ其粉末及骨細工の削屑と陶器ニ入キ二倍

量の水にて稀釋し、或は硫酸又ハ塩酸と注ぎ、能く溶解するを俟て、用ゆるも有り、或ハ又水は煮熬さぐ、雨露に洒さる鮮骨と、其儘樹根に埋むるもあり、或又之と泥炭、粘土等の内に埋置き、其内は筋肉、膠、脂の腐汁と吸収するを俟て、其土と培物し、更又枯骨と堀出して粉末とあかも有り、或又木炭と製するが如く薪を加へ、爐中に焙きて、骨灰と為す等、其他人々の異見は依て、其製法と同一せむ、然るに其中雨露に洒し、又ハ久く水中に浸くる者ハ、筋肉等と脱して幾多の養分と

減耗し、尚又骨灰と為す者ハ、焼燃し由て有用分と消亡するを殊ふ多し、又鮮骨と泥炭中に埋る法ハ、雨田培物と得るが故に、頗る良法あれども、大に人力と費もの患あり、然し雨露に洒して養分と徒に棄んよりハ、勤勞して之と採らば、其費と償ふ足らざるを省、又鮮骨と直に樹根に埋たるハ、一時顯著の功有り、と雖も、兎角大塊の儘にて用ざるハ、後ハ、朽腐甚だ遅緩ふして、養と為すに足らざる故に、其時堀返して、更に粉末とあさば、大に益用かるべし、又鮮骨よりも枯骨にて

も器械ふて細末と、之を稀硫酸と注ぎて放置
と二三日、大抵溶化せしと候て、更なる木炭末乾泥
炭、木屑又ハ細碎の埴土と混じり、能く乾かし、或ハ
多量の水と加て稀釋し用ゆるハ、最も此内の良
法とも、然ども若し硫酸と得難く、或ハ其危険猛
烈と恐る時ハ、此骨粉ハ石灰灰及び食塩等分と
加へ、濃き人溺と決く浸透る程に澆ぎ、一週若く
ハ十日毎に丁寧な攪廻し、毎に溺の減量と補ひ、
如斯くして二三月間之と化熟せしめ、之ハ便
利の製法にして、功力も亦極めて駿速あり、近今ハ

各地に屠牛多く、且豚羊馬鯨の骨、其處に從て購
求べし、而して角屑馬蹄毛髪の種類ハ、其功能骨末
より三四倍も勝る者あれば、若し之と得るの
便利あり、ハ試験して其偉功を知べし、唯憾らく
ハ世上未だ巨骨と粉碎せしもの器械ハ乏しく、之
が為小徒は手と束ることを、血ハ極多量の水分と
含て、速に腐敗し易し、故に早く植物を繁殖せし
むるの妙られども、永く維持せしむるに能はざ然ど
も泥炭、木炭、木灰等と混じり用ゆる時ハ、頗る有力
の培物とあり、肉ハ老死したる牛馬の外ハ、用由

る者稀あり。是亦血の如く水分多し。却て乾脯
し。たる魚類ふ及ば。然ども他の雜品よりハ功
り。る者なれば。若し僅少の鳥獸魚蟲の肉を得て。
培用せんと欲せば。之と寸々ハ切り溜桶ハ入れ。
厨下水又ハ薄き糞汁と加へ。之ハ韭菜類の根葉
と截て少し交置けハ。速ハ腐爛せしむ。殊ハ妙ナ
り。

第五十九章 調和糞の事

種子と蒔附け。或ハ挿木と為。地床又ハ苗畑ハ
用べき地糞水糞。熟糞。肌糞ハ。一時苗木と育る培

物なれば。嚮ハ第四章第五章及第十三章ハ於て豫
め之と示せり。今茲ハ各部ハ殊功と奏し。且年々
時期と定めて。灌用をべき肥糞の法と左ハ説ん
と欲も。然ども別ハ肌糞。地糞と試験して。大ハ効
用ハる數法と得。因て今又之と追加を。

一肌糞ハ嚮ハ第五章ハ示む。如く種子蒔附の
節。苗床ハ布べき肥糞ハ。凡て草木の灰と稱用
を。殊ハ水炭末ハ種子と速ハ萌生せしむ。異功
あれハ。別て黒き藁灰と良と。其法ハ藁灰一石
五斗。又ハ水灰一石ハ腐熟の糞。溺若くハ動物の

腐汁四斗と注ぎ、善く混和して二三日休置一者。
又一法は、草木の灰を俵に納れ、糞桶の内へ升
日程浸置て後引揚げ、よく乾く者。右何れ種
子の發生を助け、生長を壮ふものの料あり。
一地糞ハ、馬糞一荷、若くハ熟糞二荷、積肥三荷、汚
泥と乾して細く砕たる者四荷、藁灰八斗と糞小
屋に運び、適量の厨下水と見合せ、灌ぎ再三攪拌
て高く積み固く壓附て古俵と覆ひ、之と蒸熟ま
る。夏ハ十二三日、冬ハ二十三日ふして、苗木と
植附け、又ハ他の樹木と移栽る等、不用也。又是小

骨粉若くハ塵塩の類を加ふる者ハ、別て早く根
と生して爾後の成長大に宜し。兎角此肥糞ハ形
状よりて永く功効を保つ者と擇むべし。然る小
此蒸熟の時間ハ、右の如く寒暖に随て大に遅速
られ、能く其時と候て之と澆ぐべし。若く鬱蒸
の氣盛ある時ハ、根の切口と蒸し傷めて、之を為
小樹と枯木の恐れあり。慎まざるべからず。
〔註〕熟糞ハ、人糞人溺、小厨下水、又ハ長流水等分
と加へ、漸く腐熟して稍青色と顯くもの者、而
して生糞ハ稠厚き儘唯凝塊と碎くる者と云。

積糞ハ、生草、木葉等と刈集めて、能く干し、之を
厩の臥藁と加へ堆積して、稍水濕と與へ宛も
泥土の如く腐熟したる者あり、

濃き糞溺と稀釋する所ハ、皆長流水又ハ厨下
水と記せども、若し浴湯又ハ溝水、潦水等の久
く氣中へ曝れて、炭酸と含み汚物と混したる
者と得ば、極めて妙あり、西説ハ曰く、人尿一千斤
中へ、安模尼十七斤餘を含む、之と其儘放置
せば、六週間より安模尼十四斤以上と減る、
然とも之へ同量の水を加置けば、同上の日數

よて減量僅小三斤へ過ぐ、然らば是亦安模
尼の飛散を防ぎ、十分の化熟と營むの術あり、
一成長糞の法ハ、熟糞若くハ動物腐汁一荷へ流
水等分を加へ、二三日休置し者、或ハ菜油、魚油の
擦粕と細末と、其量五貫目へ灰二俵、熟糞二荷、
併へ流水適宜を加へ、十五六日休置し者、或ハ生
石灰よて生草と焦くる者へ、骨の溶液と同量の
水とを加へ、五六日間休置し者、或ハ化熟の厩糞
へ五分一の醬油糟、又ハ塵塩、塩醃の滓々と配
合する者、或又大豆と煎又ハ蒸て俵へ容れ、溫所

ふ醞釀せし凡そ六七日の後、縷と引き、堪難き臭氣と發せしふ到り、此品一俵（四斗入り）ふ流水二荷と加て能く攪拌し、之と納豆肥と云、此品復と十四五日と經て能く熟化し、時等分の水を加へ用ゆ。今世上大豆と煮て用ゆる者多けれど、斯の如く製せし者ふ及ばず。又他の穀類も此法ふ倣ふと利とせ。右の諸法ハ大率芽の發生長育と催進るの殊功あり。

一寒糞ハ、初冬落葉の頃より大寒の前、後ふ必せ澆用せし、其用ハ本糞と堅實壯盛し、兼て寒

氣を護する為ふれば、永く温氣を維持し、且つ夏日より三倍以上の強力なる品物と擇と要せ、其法ハ厩糞又ハ積肥五荷、馬糞一荷、塵塩二斗、煤一荷と調勻し、たる者、或ハ土硫黄（土質と混漚し）斗生糞二荷と能く混和し、二三日休置し、者、或ハ床下の土、若くハ溝泥と乾して細く碎く者五荷、馬糞一荷、木灰一俵、稀薄の動物腐汁と澆ぎ、齊等ふ混合せし者等あり、其他細末油粕又ハ小糠へ生糞等分と加へ、又ハ鶏糞ふ薄き糞汁と注ぎ、不同多く溶し用ゆる等、各時の宜ふ應て斟酌

し、殊小骨粉、牡蠣又ハ人髮、獸毛等を集めて
埋置く時ハ、數年の間其功能を保つべし。
一結菓糞ハ、骨粉、塵塩各一斗、熟糞一荷、流水三荷
と調勻し、三日以上休置し者、或ハ魚油粕又ハ干
鰯と細末し、之ハ生糞を加へて能く腐熟せしめ。
此品一荷、小醬油粕一俵又ハ塵塩一斗と混し、流
水三荷と澆て薄くし、三四日の間休置し者、是
小木灰二斗と加ふるハ別て佳し。又馬糞一荷
骨粉、塵塩各二斗と調合し、流水五荷と注て二三
日休置し者等あり、總て此肥糞ハ花落んとす

る頃用いて、菓實の肥豐を助け、能く枝上小保ち
て久旱霖雨の爲小徒零まゐるの患おくしむ。
一美味糞ハ、納豆糞又ハ熟糞二荷、塵塩二斗、木灰
一斗、小流水二荷と注ぐ者、或ハ小糠又ハ麥糠四
斗、醬油糟半俵、木灰一斗、熟糞一荷半と調和し、五
六日休置之ハ復流水五荷と注て、尚又一二日休
置し者、或ハ油粕又ハ魚油粕の細末四斗、塵塩一
斗、木灰一斗、熟糞一荷と調合し、五六日休し後、
更ハ流水四荷と注ぎ、二三日休置し者等あり、是
と菓實全熟の廿四五日以前小用おれハ、其肥豐

成熟と進め、大小香味と美好ふまゐるの妙功あり。
其他蠶糞酒糟又ハ混合糞の類、其時ハ應じて得
べき物と採り、泥水等を加へて澆用せば、必ズ非
常の功能ある者も多かるべし。蓋し山海の産物
各處に於て自ら異あり。其内ハ於て最も得易く
價安き品物と擇み、以上の法則と照考して其功用
と推し、力所及心志と勞して之と實業ハ試みて、却
て高價の品物ハ勝る者と得べし。故ハ曰く、實益と
重ざる者ハ經驗と先ふせよと信哉この語や。
菓木栽培法卷之四 終

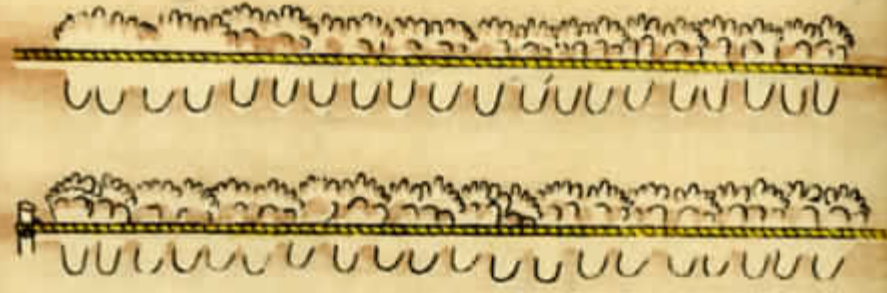
藤井敬 著
加藤竹齋 畫

果木栽培法圖

明治九年
版權免許
靜里園發行

圖 二之卷法培栽木菓

圖六第



第七圖



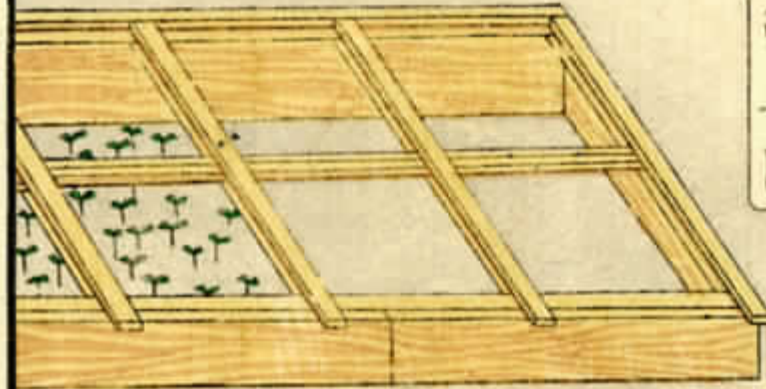
第八圖



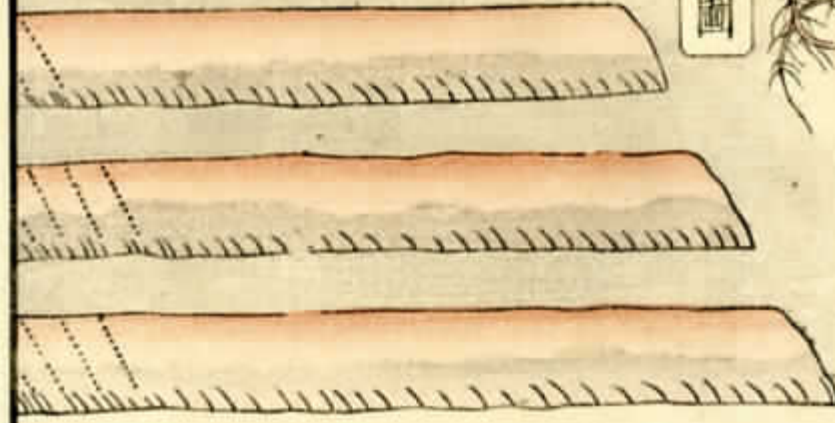
第九圖



第三圖



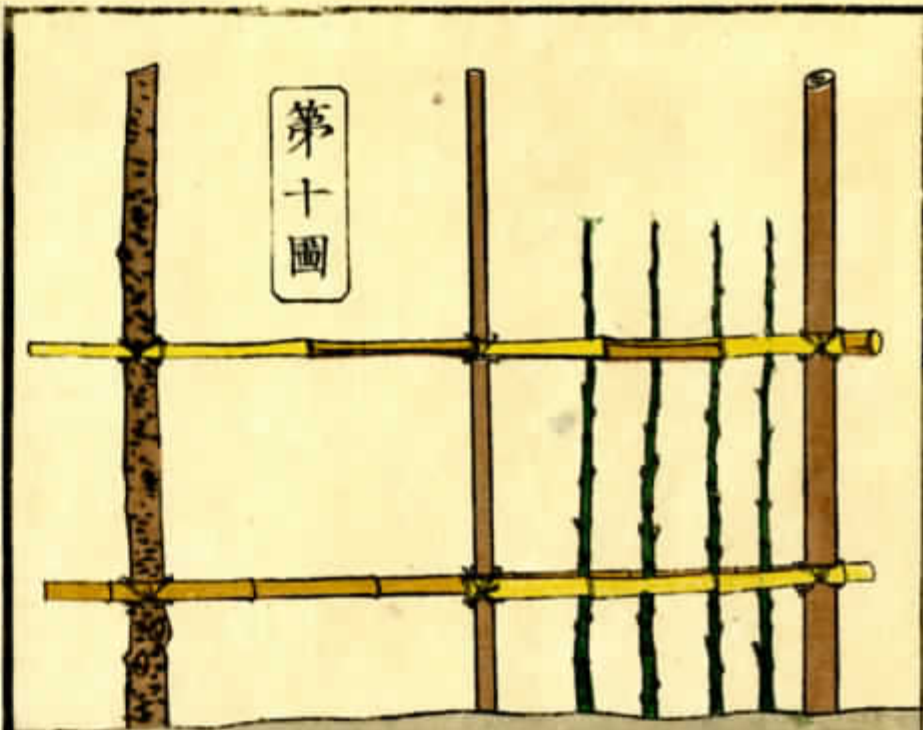
第五圖



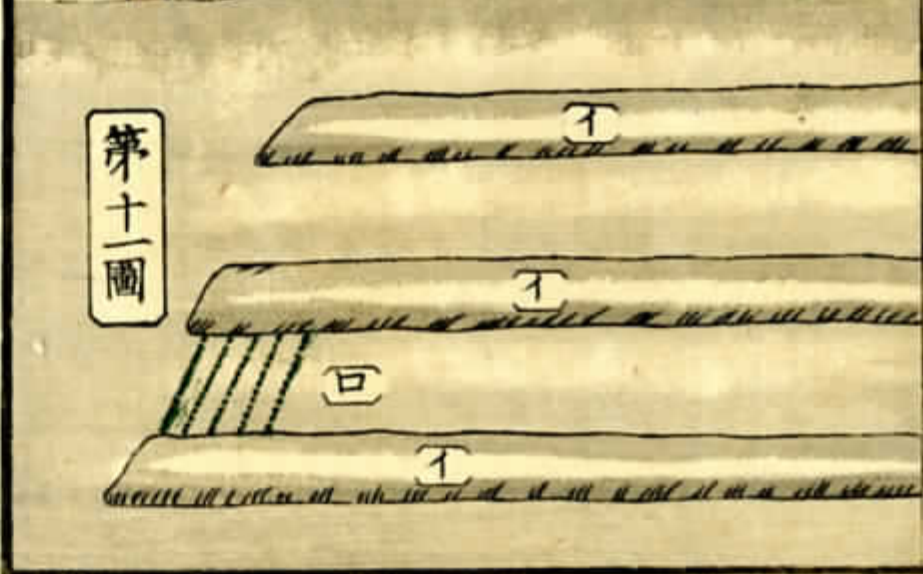
第四圖



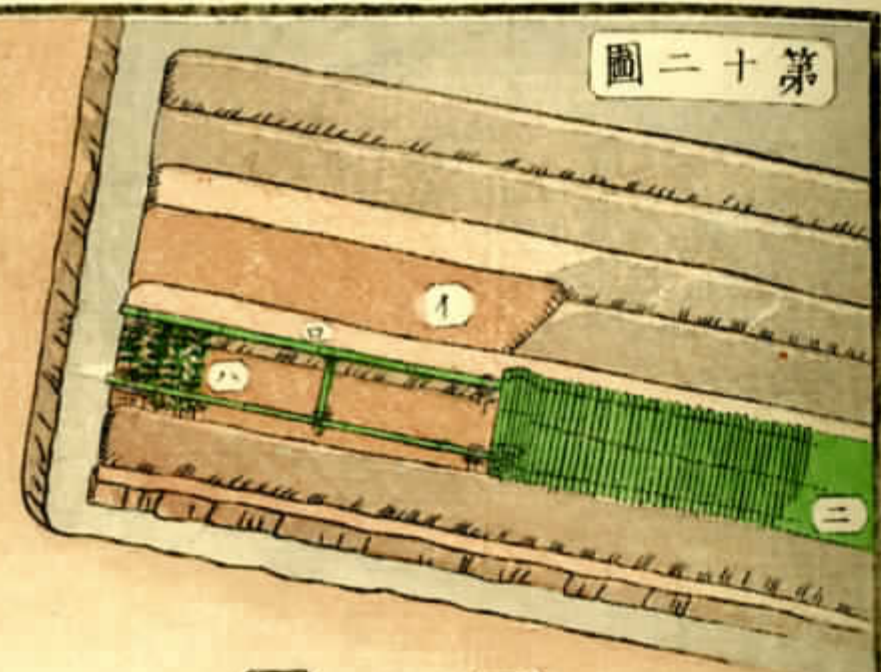
第十圖



第十一圖



第二十圖



第十三圖



第十四圖



第十五圖



第十六圖



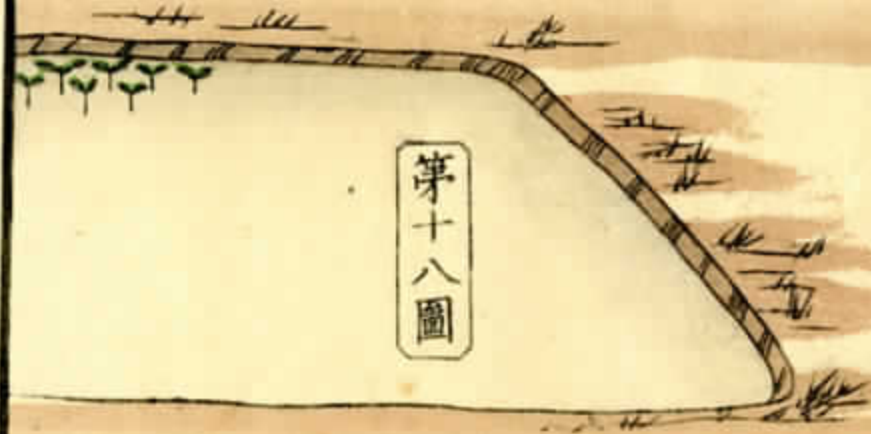
第十九圖



第十七圖



第十八圖



第二十圖



第廿一圖

外



内



第廿二圖



第廿三圖



第廿四圖



第廿五圖



第廿六圖

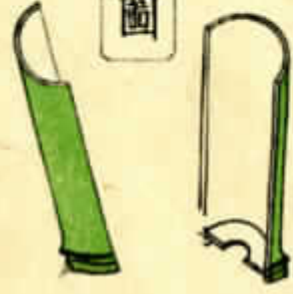
第廿九圖



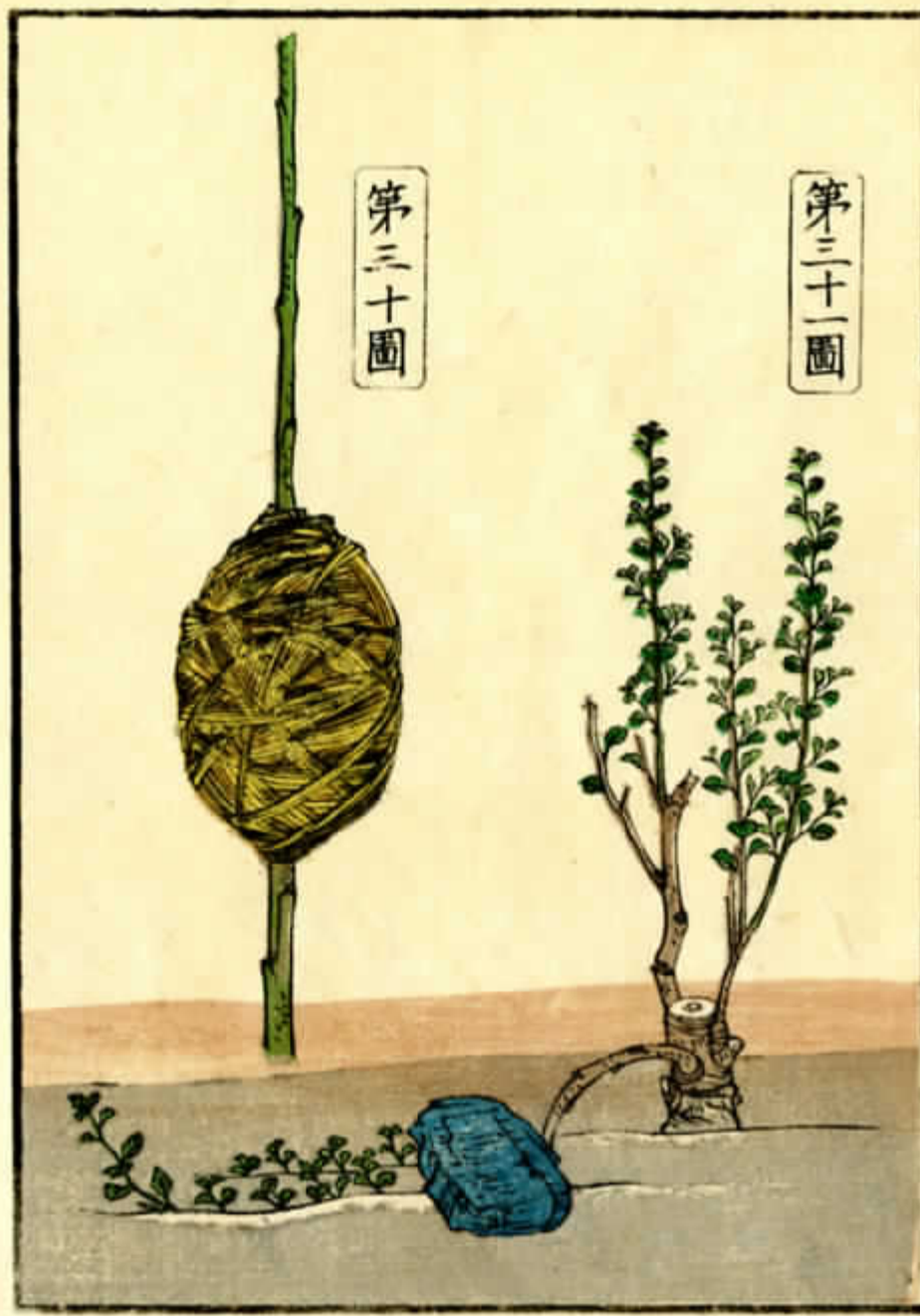
第廿七圖



第廿八圖



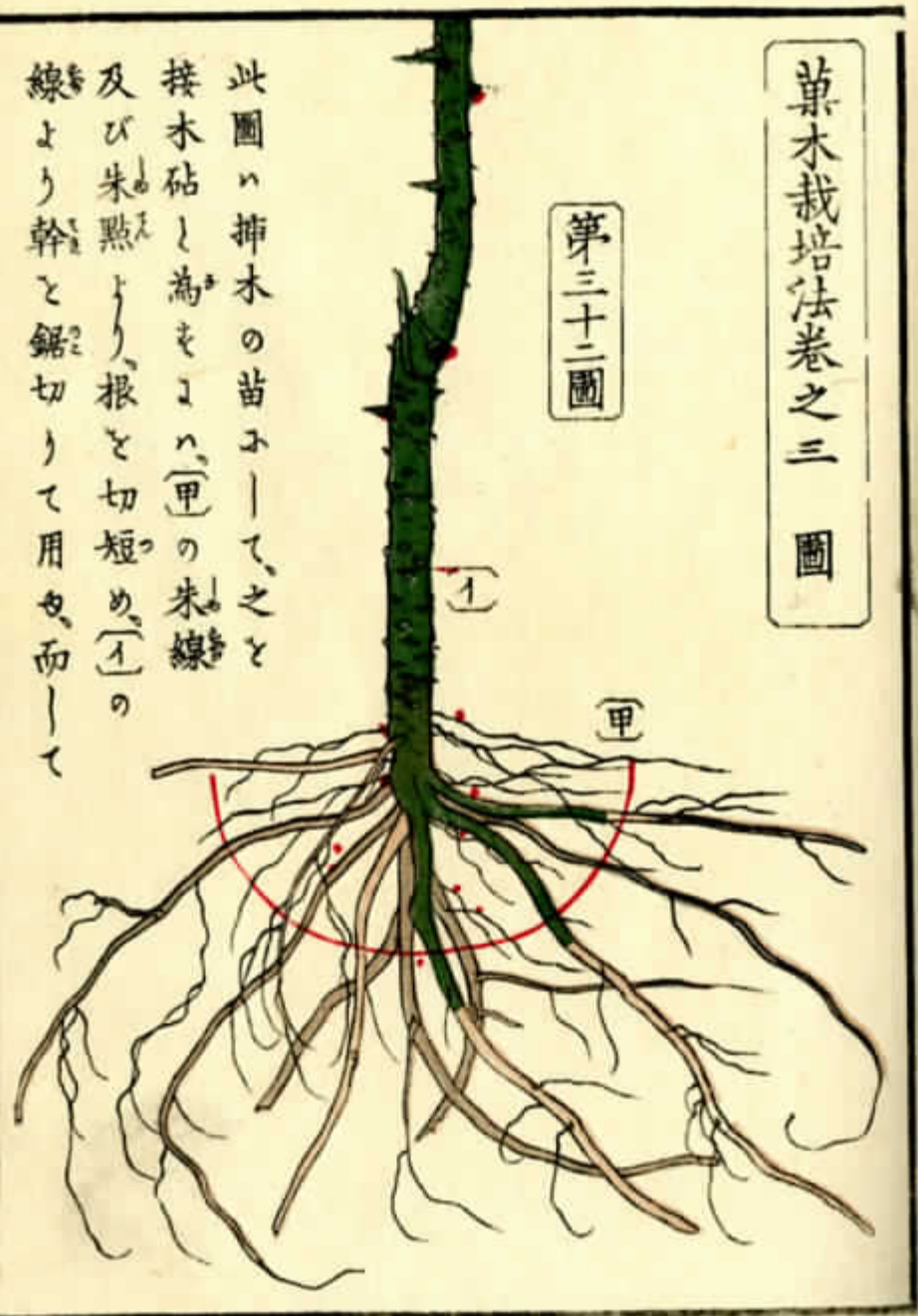
第三十一圖



第三十圖

草木栽培法卷之三 圖

第三十二圖



此圖の挿木の苗ふいて之と
接水砧と為さるゝ(甲)の朱線
及び朱點より根を切短め(乙)の
線より幹を鋸切りて用や而して

夫より以上の小枝を悉く朱點より切捨て之を三つに切



う(イ)より

(ロ)までと挿穂

とし、(ロ)より(ハ)までと

接穂とし、(ハ)以上の梢は

質軟弱れば用ゑ堪へば



第三十四圖



第三十六圖

第三十五圖



第三十三圖



第三十九圖



第三十七圖



第三十八圖

第四十圖



第四十一圖



第四十二圖



第四十三圖



第四十四圖



第四十五圖



第四十六圖



第四十七圖



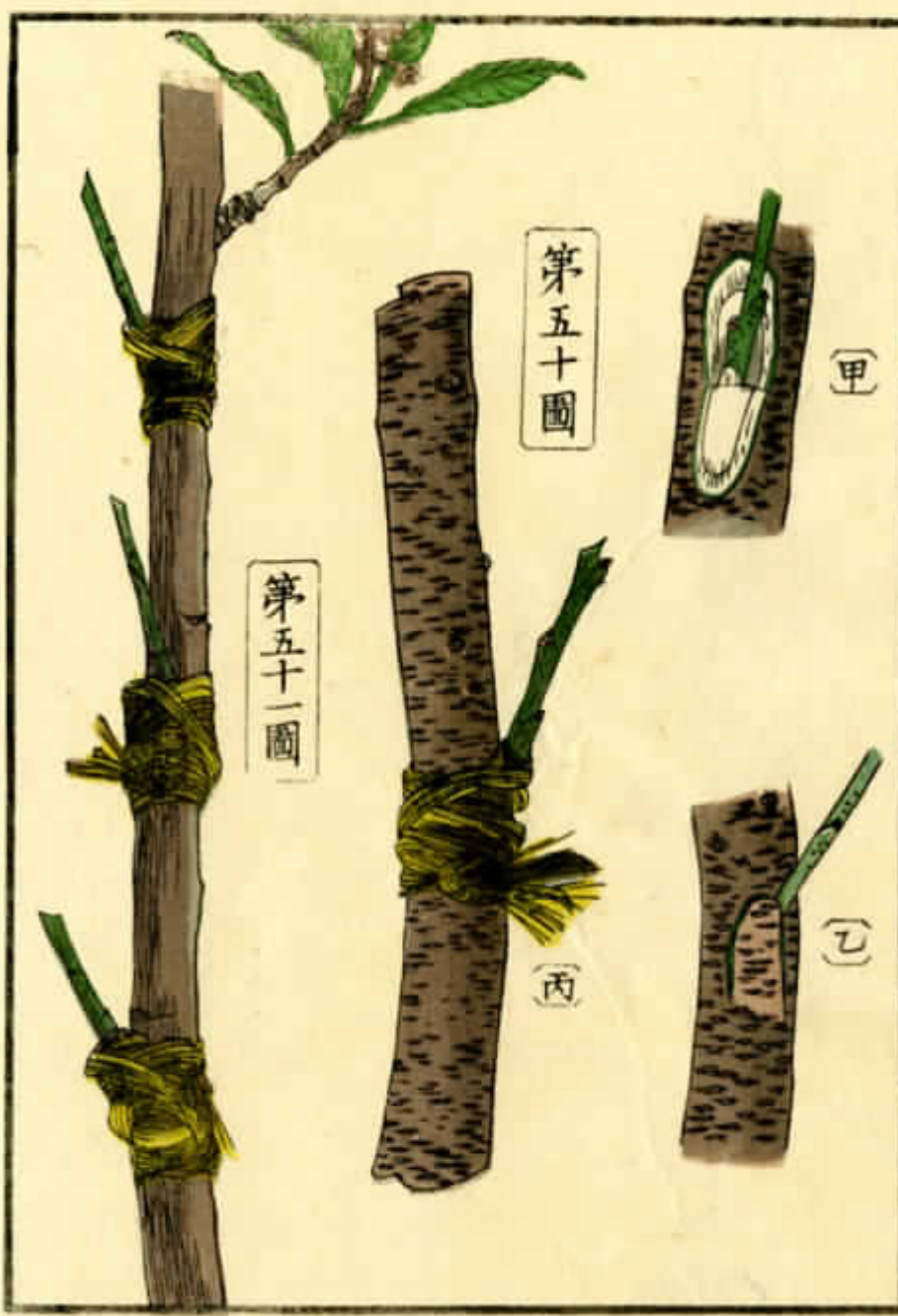
第四十八圖



第四十九圖



第五十圖

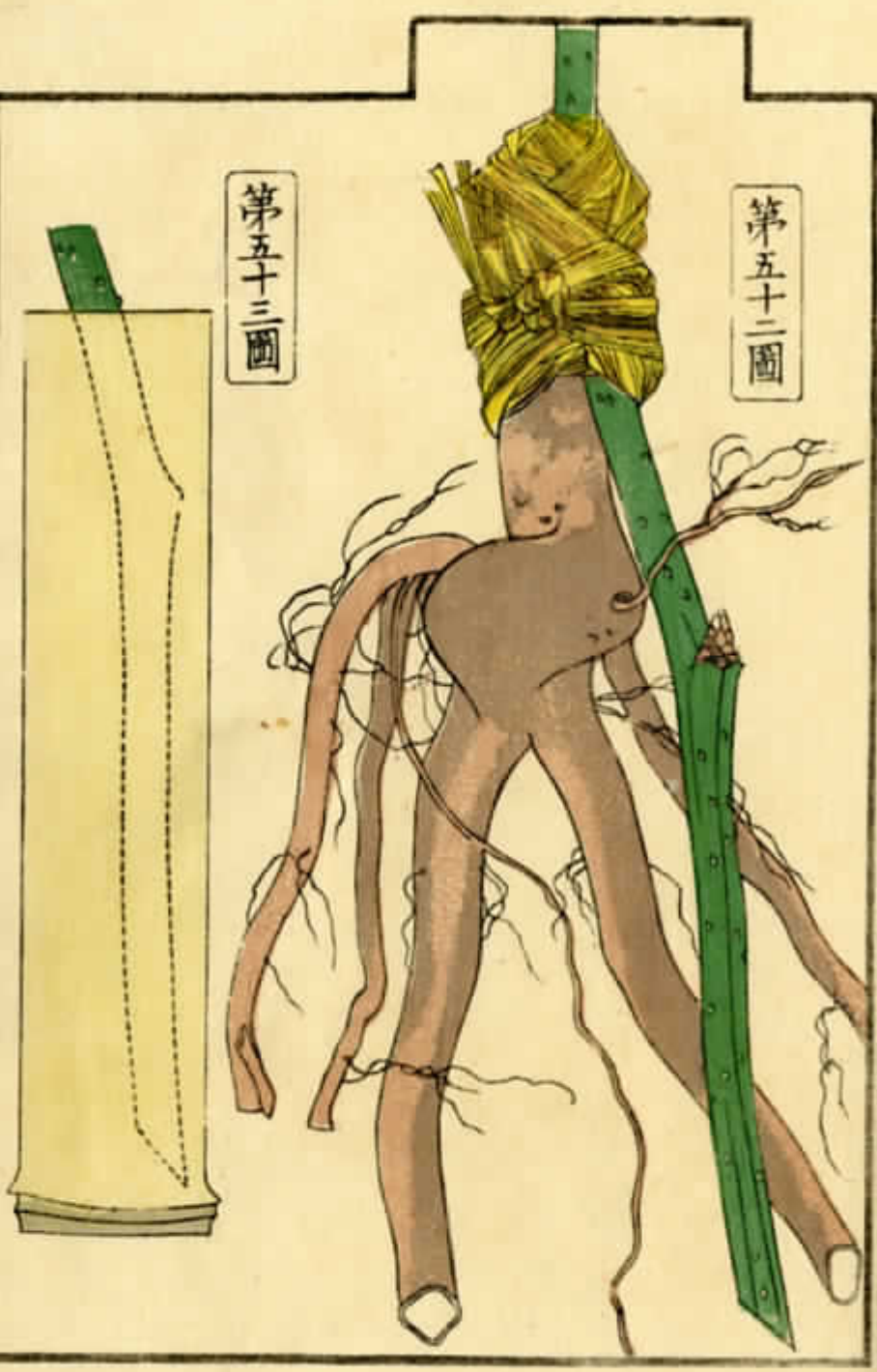


第五十一圖



第五十二圖

第五十三圖



第五十四圖



第五十六圖



第五十五圖



第五十七圖



第五十九圖

(乙)



(甲)



第五十八圖



丙



第六十圖

外



丁



第六十一圖

戊



第六十二圖



第六十三圖

第六十四圖



丙



第六十五圖

外



第六十六圖



第六十七圖

甲

第六十八圖



乙



本草綱目卷之六 木部 第六十九圖

第六十九圖



第七十圖

第七十一圖



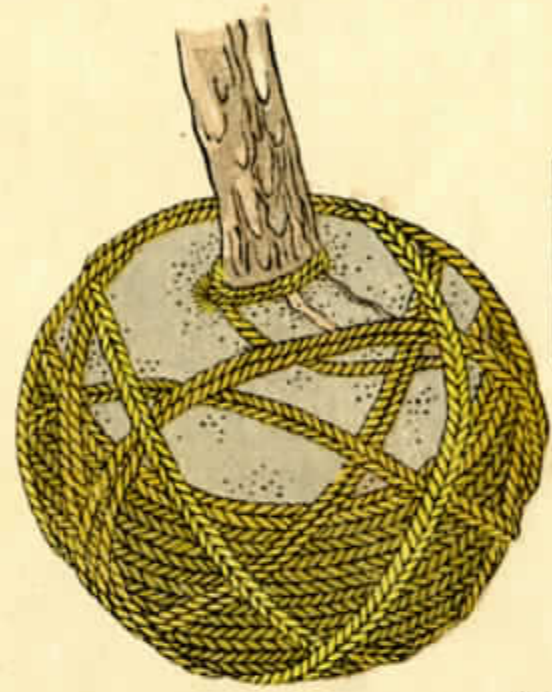
第七十二圖



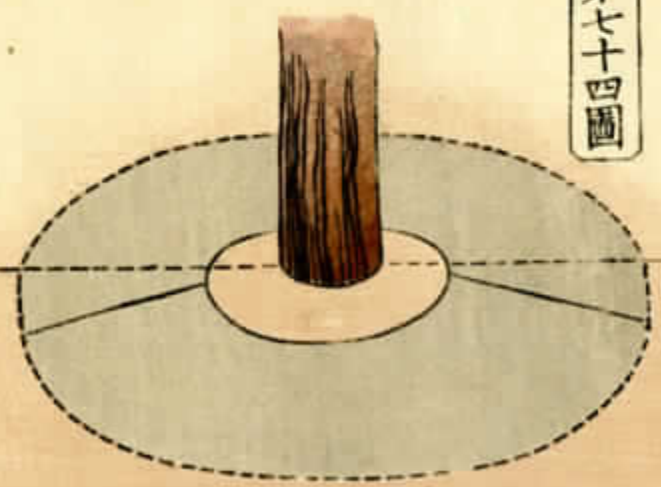
本草綱目卷之六 木部 第七十一圖 第七十二圖

草木栽培法 卷之三 青里園藏版

第七十三圖



第七十四圖



菓木栽培法圖畢

明治九年五月廿七日版權免許
同年五月卅一日刻成

著述出版人

東京第八大區二小區
内藤新宿北町十六番地
長野縣士族
藤井



一 菓木栽培法 五六七八 彩色圖入 追刻

此諸卷ハ一菓樹毎ニ其育養ノ方法ヲ論スル者ニレテ皇國在來ノ品ハ勿論近來新渡ノ西洋種ニテモ各其種類ニ由テ優劣アル説并ニ人ノ好尚ニ從テ損益アル論ヨリ栽培ノ用法手入ノ異同及ヒ年々枚葉ノ多寡價直ノ高下等ノ事ヲ精載レ且ツ一菓實毎ニ真形着色ノ圖ヲ附レ卷末ニ右ノ諸件ヲ集テ表ト為レ又附説ヲ加ヘテ其餘意ヲ辨論レ總テ菓樹ノ事ニ於テ一切遺漏スル一ナレ

草木栽培法 卷之三 青里園藏版

發行所

東京芝區三田四国町三番地

三田印刷所

東京京橋區南傳馬町三丁目

有隣堂

全銀座四丁目

博聞社

全日本橋區通三丁目

丸善商社書店

全通四丁目

牧野善兵衛

全通二丁目

小林新兵衛

全芝區三田壹丁目

開成堂